石巻市在宅被災者健康調査（ローラー作戦）ボランティアに参加して

北里大学医学部　神奈川県「地域周産期・救急医療連携教育」寄附講座　特任助教
兼　北里大学病院　患者支援センター　医療ソーシャルワーカー
早坂　由美子

本ローラー作戦は、宮城県石巻市市役所が主催し、被災地における要介護者・在宅医療必要者スクリーニングプロジェクトです。被災者自宅を個別訪問し、市役所の作成したフォーマットに従い、情報をいただいてくるプロジェクトです。

日時：
2011 年 4 月 15 日（金）　8：00～16：00
2011 年 4 月 16 日（土）　8：00～16：00
2011 年 4 月 17 日（日）　8：00～16：00

対象：石巻市の壊滅地区以外で最も被害のひどかった地区の元世帯数 11,271 世帯

方法：対象地区の全戸訪問

参加ボランティア：医師、看護師、ケアマネジャー、ソーシャルワーカーなど延 300 名

感想：私は 16 日と 17 日の２日間参加しました。調査対象地区は津波の爪痕が大きく残されていて、やっと道路が通り、車は壊滅地区手前まで通れましたが、両脇にはがれきの山が続いているといった状況でした。まずその被災範囲の広さに驚きました。

１日目は３０世帯余りが担当の調査対象でしたが、在宅世帯は３世帯だけでした。それ以外の方は避難所や親せき宅へ避難されているか、死亡・行方不明の状況でした。在宅の３世帯は家が頑丈に造られており、

１階天井まで浸水はしたけれど、掃除や修繕をすれば、屋根や壁はあり、住める世帯でした。車は流されたけれども新たに購入したという方もいました。ライフラインは電気が一部通っているだけで、水、ガスは通っていませんでした。食事、水は配給や炊き出しとのことでした。残っている家の姿は１階が流され、骨組みだけ残り、２階は被災前の普通の姿というところが多くありました。避難所から日中自宅の片づけのために戻ってきている方は数名いらっしゃいましたが、悲惨な現状と先が見えない不安で疲れ果てているといった印象でした。

２日目は、海沿いの地区を調査し、ここは７０世帯弱が担当の調査対象で、１０世帯が在宅生活を送っていらっしゃいました。昔からのコミュニティができていて民生委員さんが担当地区の世帯状況をほとんど把握されており、近所のつながりが感じられました。「通っていた病院が津波で壊滅した。薬をどこでもらったらよいか？」と言った質問を受け、私たちから再開医療機関リストを見せたところ、近くにもあり安心された方もいらっしゃいました。一方では妻と子どもと孫を流されたという方からも話を聞き、「もう一人の子

どもが来てくれているので何とかなっているが、来てもらえなければどうなっていたことか・・・。」とつぶやかれ、被災者の方の悲しみの深さを感じました。ここでは、電気が通ったのが３日前ということで、それまではテレビもなかったためか、あまりの情報の少なさが気になりました。この地区の方はほぼ全員の方が車を流されており、市役所まで徒歩では２時間近くかかりそうな場所で、市役所に情報をとりに行くこともできなかったのだろうと思われました。水と移動のための足と情報がまず必要であると感じました。

そのような中で４月下旬から小、中学校の再開のため避難所となっている学校から出なければならないという話もあり、被災者の方々の不安が増すような現実が降りかかっており、心が痛みました。石巻市の場合、被災をしていない場所もあり、道を隔てれば、ライフラインの問題はあっても営業している店や浸水しなかった家があり、避難所を出ることになった場合、他市や他県に行くというより危険性のある半壊の自宅に戻る方も多くなるのではないかという心配も生まれてきました。

今回、支援物資として卓上コンロ、ボンベ、鍋、おたま、茶碗などをセットにしたものを、日本医療社会福祉協会の会長をはじめ、有志の医療ソーシャルワーカーや病院職員からの寄付で購入し 20 セット持参しました。石巻市役所では「市で預かり、市民からほしいという問い合わせがあれば渡します。」とのことだったが、1 件も問い合わせがないとのことでした。調査地区のほとんどはまだガスが通っていなかったので、炊き出しをしている所などに自分たちででかけ、町を歩いてる方に声をかけ、直接手渡しました。ほとんどの方が「これ、欲しいかったー」とおっしゃられ、アッと言う間に渡し切りました。

日和山公園から見た被災地

最後に今回のボランティア活動で、出会った方に「希望をください」と言われた言葉が最も印象に残りました。